

★★

深月ユリア（フリージャーナリスト）

日米首脳会談、石破首相は対等な日米関係を築けるか

★★

【日米首脳会談はオタク気質の石破首相の功績か】

2月7日、ホワイトハウスで石破茂首相とドナルド・トランプ大統領による初の日米首脳会談がホワイトハウスで行われた。2期目のトランプ大統領が会う外国の首脳として、石破首相はイスラエルに続いて2番目である。

結論からいえば、石破首相のトランプとの初会談は大成功といえるだろう。石破首相はトランプ大統領に「非常に強い男」と評され、日本政府内には同氏に「組める相手」と印象づけることに一定の成果を得られたと多くのマスメディアに評価され、2月7～10日の石破首相の支持率もNHKの調査によると5%上がり44%となった。

当初、複数のメディアや評論家は生真面目でオタク気質な石破首相と劇場型政治家でビジネスマンであるトランプ大統領とは相性があわないのではないか？という懸念を抱いていた。

しかし、オタク気質な石破首相はトランプ大統領に関しても、熱心に研究たのみだ。

定期的なトランプ大統領に関する勉強会で複数の講師からトランプ大統領の性格・政策について講義を受け、独学でトランプ大統領に関する著書を読みあさっていた。

勉強会の講師によると、

「石破首相はトランプと対決せず、人としておだて、アメリカへの経済投資を持ちかけるという作戦に徹した」という。

【石破首相は田中角栄の外交政策を受け継ぐ】

もちろん、日米の政策で考え方が一致しないものはある。例えば、トランプ大統領は親イスラエルでガザからパレスチナ人を追い出し、アメリカとイスラエルでガザを管理するつもりだ。しかし、石破首相はガザはパレスチナとイスラエルとの2国家解決を引き続き支持している。更に、ガザからの避難民を日本が喜んで受け入れることを表明している。対中政策についても、石破首相は田中角栄元首相の外交をモデルとし、日本は

アメリカからみた中国の防波堤になるのではなく、中国・アメリカ両国と対等な関係性を構築さようとしている。中国は日本にとって最大の貿易相手国であり、日本企業にとっても最大の投資先のひとつなので、日本が中国と対立するメリットはない。

しかし、トランプ大統領にとって中国は仮想敵国であり、中国にたいして60%の関税をかけようとしている。

石破首相は日米両国の立場は違えど、日本とアメリカが互いに協力しあえる面、日本がアメリカにとってどれくらいメリットがあるかを、ビジネスの取り引きのように端的にプレゼンした。

そして、アメリカに対する投資学を一兆ドルまで引き上げることを表明し、「公開前の情報だが」と前置きしたうえで、ISUZUがアメリカに工場を新設するなどの話もした。よくある心理学の相手の心を開かせるテクニックに「あなただけに伝える話」をするというものがある。

そして、注目されているUSスチール買収問題に関しては、「買収ではなく投資だ」と主張した。

トランプ大統領はユートピア的な理想論を述べあう首脳会議より、具体性な数字を提示した取引を好むので、この作戦は適切だろう。

【石破首相はトランプにとって「強い男」か】

トランプはプーチンのような「強い独裁者」に憧れている。自分に媚びる人間は都合よく利用するが、強い人間、特にマキアベリズムの強い政治家には好印象を持つようだ。

これまでの日本の首相は日米地位協定という不平等条約の元、アメリカには逆らえず、日米会談でもアメリカに媚びた態度をとる首相が多かった。

しかし、石破首相は会談中、トランプに媚びるどころか、日本のメディアからは「失礼ではないか」と批判されるほど椅子に深々と座り、肘をついたまま握手し、記者たちの前でトランプ大統領に関するジョークを言った。

「(トランプ大統領の印象について)テレビで見ると声高で、かなり個性強烈。恐ろしい方という印象が、なかったわけではないが……」

「実際にお目にかかると、本当に誠実な、力強い、強い意志を持たれた方。合衆国と世界への強い使命感を持たれた方と、まったくお世辞抜きで感じたところ

ろです」

ここで石破首相は、下げてから上げるという心理学テクニック鉄板の「ギャップ褒め」を展開した。

また、ナルシストなトランプ大統領の性格を読んでか、トランプ大統領が好むストーリーを語った。

「安倍元総理のご夫人、安倍昭恵さんを通じまして、大統領閣下の本を頂戴いたしました。そこにはPEACEと書かれておりました。非常に感銘を受けましたところでございます。そこには大統領閣下の深い思いが込められていると感じます。

昨年7月であったかと思えます。大統領になられる前でしたが、狙撃をされたとき、ひるむことなく立ち上がり、こぶしを手に突き上げて。その時の写真が非常に印象的でありました。その背後には星条旗がはためき、そして青い空が映っていた。あの写真はおそらく歴史に残る一枚だったと思えます。

あの写真を見て、私はおそらく大統領閣下の時に、自分はこうして、「神様から選ばれたんだ」「必ず大統領に当選し、再びアメリカを偉大な国に」、「そして世界を平和に」、そのように確信されたに違いないと思えました」

この話を聞いたトランプ大統領は「Very nice. Thank you」と喜んでいた。

ここで、石破首相自身「トランプが神に選ばれた」と思っているとは言わず、「トランプが神に選ばれた、と自分自身で確信しているに違いない」という表現を選んだことも、実に巧妙である。前者の表現をしてしまったら、トランプ大統領を「神に選ばれた」と自ら認めてしまい「神に選ばれし大統領と、ただの日本の首相」という上下関係が発生するが、後者はあくまで「神に選ばれた」ことをトランプ大統領が勝手に信じている(妄想している)という意味になる。

石破首相自身がキリスト教徒であり、信者同士であるが故に成り立つ会話だったのかもしれない。深読みすれば、

「トランプ大統領自身が神に選ばれたと確信しているなら、神が喜ぶような正しい行いをしなければならぬ。それによって、トランプ大統領が本当に神に選ばれたのか、ただのおかしな妄想を抱くデマゴグか分かる。いまこの場で世界中が証人だ」

というプレッシャーも同時に与えることができる。

会談中にアメリカが日本との貿易に関して追加の関税をかけるかの話は出なか

ったので、もし追加の関税税をかけたなら日本は報復関税をかけるのか」との記者の質問に、『『仮定のご質問にはお答えをいたしかねる』というのが日本の大體定番の国会答弁だ』と返し、笑いをとった。

これに関して、トランプ大統領は「とても良い答えだ。首相は自分が何をすべきかわかっている」とコメントして、記者から石破首相の印象を聞かれた際に「非常に強い男だ (I think he's a very strong man.)」「素晴らしい仕事をするだろう。もうちょっと弱いほうがよかった」と冗談交じりに答えた。

【「あなたは偉大な総理になるだろう」に込められた皮肉】

今回の会談は石破首相、トランプ大統領とのお互いの探りあいの意味が強かっただろう。これらの会話は互いに思ってもいないことを誉めあい、言葉の裏には毒々しい皮肉が含まれていて、それに対してどんな反応をするのか、互いの技量を計り合っているようにも聞こえる。

トランプ大統領は石破首相に、「あなたは偉大な首相になるだろう You will be a great Priime Minister」と直筆の色紙を送ったことが多くのマスメディアに評価をされているが、筆者はここにも皮肉なニュアンスを読みとった。「なるだろう」とは未来形であり、随分と上から目線ではないか。

「まだ偉大な首相ではない(安倍元首相は偉大だったが、君はまだこれから)」とも読める。石破首相はかねてより総理になって日本を改革したいという使命感が強く「首相になるならば天命」という著書も出版している。神からの天命を受けた歴史に残るような「偉大な総理」になりたいのである。

トランプ大統領は石破首相のこのような悲願を知るが故に、「あなたが偉大な総理になる可能性がある。ただし、そのためには世界のトップであるアメリカからも評価されなければならない、安倍元首相のように、アメリカの良き子分となれば、偉大な総理だと評価してやる」というメッセージを発信したと考えるのは深読みのし過ぎだろうか。

今回の日米会談では、石破首相のトランプ大統領だろうが誰だろうが、人類を平等にみる考え方と、研究熱心なオタク気質が武器になったのかもしれない。石破首相が今後の日米関係をより対等なものに変えていくことに期待したい。

ユリア記